

ロシア貴族とウサージバ： A・オレーニンと別邸プリューチノ（2）

坂内知子

1. 文官オレーニンの活躍

国家のために

日本のロシア史研究にも大きな影響を与えたロシアの歴史家、B. O. クリュチェフスキイ（1841-1911）はアレクセイ・ニコラエヴィチ・オレーニン（1763(64)-1843）を評して言う。「古代ローマの行政官のごとく、国家と祖国の利益とあらば、いかなる方面にも出向き、巧みに仕事をこなしてゆける実務家を養成しようと目論んだ、エカテリーナ二世とベツコイのシュレーが生み出した輝かしい作品の一つであり、その正当性の証左のひとつである。」さらに、「A. H. オレーニン、それは我が国の啓蒙と歴史文献学の半世紀であった……彼は啓蒙と歴史文献学の方向を定めたわけではない、しかし、1843年までの50年間のロシアの啓蒙の歩みのなかで、オレーニンを外しての大小の重要な文化的事業は思い出すことは難しい。強力な発光体ではなかったが、彼はこれらの分野で同時代の輝かしい才能すべてに自己の光を投げかけた……」とさえ言っている⁽¹⁾。

オレーニンは10歳でペテルブルグに出て、侍従幼年学校に入り、エカテリーナ二世に見出された。砲術を学ぶ目的でドイツに派遣され、1880年から1885年の5年間ドレスデンで学業の仕上げをした。祖国ロシアに

(1) Ключевский (1980, 130).

帰ったオレーニンは晩年のエカテリーナ二世の下で軍務に就き、実質的な国家勤務に入った。留学で得た知識でプスコフ軍管区に砲兵隊を創設し、スウェーデンとポーランドの戦役に従軍した。この後も彼はずっとロシアで勤務につき、続くパーヴェル一世、アレクサンドル一世、ニコライ一世と、四代の皇帝に仕えることになる⁽²⁾。

オレーニンは約10年の軍隊勤務の後、1795年にいったん退役して、すぐに文官に転身して官務に就く。まずエカテリーナ二世のつくった国立紙幣銀行に入り、幹部となり、2年後には造幣局長となっている。

この間、エカテリーナ二世が没し、母帝に反感を抱いていたパーヴェル一世が登場する。内政に大きな波乱のあったパーヴェル帝の時代も、オレーニンの実務的手腕は必要とされ、そのキャリアが躓くことはなかった。

国の財政はエカテリーナ二世が濫造した大量の紙幣によって混乱していた。パーヴェル一世は兌換によって紙幣を回収すべく、正貨鑄造を銀行に命じた。ペトロ・パウロ要塞内にある造幣局の責任者となったオレーニンは、アイルランド人企業家のガスコインに協力を求めて銀行の敷地内に新たに造幣所をつくろうと奔走するが、兌換総量があまりに巨額だとわかり、皇帝の熱意が失われて、オレーニンの努力は実を結ばなかった。しかし、その仕事ぶりは認められ、1798年彼は四等文官に上げられ、1年後には元老院第三局の局長になるという目覚ましい昇進を遂げ、政権の近くで仕事をしようになった。

その後、1801年の3月にパーヴェル帝が暗殺され、アレクサンドル一世の開明的な時代になると、新帝から「Tausendkünstler（千芸の達人）」⁽³⁾と言われ、オレーニンはますます重用されていくこととなる。

1801年4月、政変の直後にアレクサンドル一世によって国家評議会（暫定）が設置され、オレーニンは国家評議会官房の一部署の長となった。

(2) A. H. オレーニンの生涯の記述については以下の著作による。Файбисович (2006), Голубева (1997), Тимофеев (2007)。

(3) Вигель Ф. Ф. Записки. М., 1928. Т. 2. С. 47.

1802年より内務省官房準備のためスペランスキイとともに働き始める。省庁制度をつくって行政機関を近代化すべく、法整備に取り組むスペランスキイは貴族の出自ではなかったが、自由主義的観念に動かされていたアレクサンドル一世の庇護のもと、孤独な超人的な仕事をしていたのだ。1802年に新たに8つの省が創設され、1810年末にはスペランスキイの尽力により国家評議会が設置された。ロシアに国会ができるまで存在した唯一の立法諮問機関であった。

オレーニンはスペランスキイの仕事を補佐し、この間他の職務も兼務しつつ、正式に発足した国家評議会の運営に奔走した。1812年、ナポレオンのロシア侵攻という状況のもと、アレクサンドル一世は貴族層からの反発を無視できず、スペランスキイを解職し、彼に替わってオレーニンを国家評議会秘書の職務代行とした。彼はその後14年余もこの代行職にあり、1826年のニコライ一世戴冠式の日にとやっと正職に任命された。

新旧の政治理念の支配勢力がしのぎを削ったアレクサンドル一世治世の初期はオレーニンにとってきわめて微妙な時代であった⁽⁴⁾。優れて有能な官僚であったが、政治家ではなく、特にどの党派に与することもなかった。また彼は明確な政治思想の持主ではなかったが、生涯政治信条的には王権派で、個人的には家父長的な家庭生活のありかたを愛し、その延長の国家を愛するパトリオットであった。

貴族としても、政府の要職が回ってくる特権の大貴族の世界には入れない、門地、家柄も今ひとつの、爵位も持たない普通の貴族でしかなかった。官等上の上出世も特権的な優遇措置が見られるものではないが、有能な官僚として常に要職にあるオレーニンには名門貴族たちのねたみや反発があった。政権近くで目覚ましい活躍をするオレーニンを、進歩派の旗頭 B. II. コチュベイはエカテリーナ時代の遅れた考えの人物と見なして、激しく嫌

(4) アレクサンドル一世時代の政界に関しては、黒澤岑夫『ロシア皇帝アレクサンドル一世の時代——たたかう人々』(論創社、2011)。

悪した。1802年にオレーニンはタヴリーダ県知事へ赴任を提示されている。彼は内務大臣のコチュベイに必死で抗わなければならなかった⁽⁵⁾。

国家評議会秘書職務代行として、皇帝に直接報告をする権利を有する職務にあった1810年代が、オレーニンが官僚として最も活躍した時期であろう。しかし、アレクサンドル一世がナポレオン戦争後次第に保守化し、アラクチャーエフの存在が大きくなるにつれて、オレーニンは皇帝から遠ざけられることとなる。

位階としては、オレーニンは1830年にニコライ一世より二等官に上げられ、文官としての実質的最高位をきわめた。しかし、多大な業績にもかかわらず生涯爵位は与えられず、貴族として特別の栄誉はなかった。幾多のポストを兼務しながらも、彼のキャリア後半は文化芸術の分野が主舞台となり、そこでこそ彼本来の個性とエネルギーが活かされていったのである。

帝立公共図書館長・芸術アカデミー総裁になる

ドレスデンで研究してきた、ロシア古代の軍사용語についての論文「ロシア古代軍사용語解釈」をロシア科学アカデミーに提出し、オレーニンは帰国翌年の1786年にアカデミー会員になった。ドイツで18世紀のヨーロッパ文化を全身で吸収したオレーニンは歴史学を自分の学術研究のベースとし、ドイツの美術史家J.J. ヴィンケルマンの影響の下で古典ギリシャ世界へのあくなき憧れを抱くようになっていた。それはパトリオットであるオレーニンの学術活動の方向を導くものとなり、彼はロシア古代の文化に流れ込んだギリシャ文明の痕跡を生涯追い求めることとなる。のちに彼の研究活動はロシア考古学や古文書学の草創期の一端を担うものともなった⁽⁶⁾。また、若き日のドレスデンでの生活は彼の芸術、特に絵画、彫塑の

(5) Файбисович (2006, 86-87).

(6) Кружнов (2005, 715), Козлов (1999).

才能を育てた。帰国後オレーニンはペテルブルグで多くの文学者・詩人と交わり、デルジャーヴィンやヘムニツェルの詩に挿絵を描いた。彼は1790年代には学者、美術家としても知られた存在になっていたのである。

1808年、帝立図書館の館長ストロガノフ伯爵はオレーニンの資質を見込み、自分の補佐官にして、実質的に図書館の運営を託した。それまでただの書物倉庫のような存在だった帝立図書館を、オレーニンは自分が若き日に恩恵に浴したドレスデンの王立図書館のような、学術と啓蒙活動の中心にしようと思ったであろう。勤勉で整理好きの彼は翌年には「サンクト・ペテルブルグ帝立図書館のための新しい文献目録整理方法の試み」⁽⁷⁾を作って、出版している。

ペテルブルグに建てられた最初の国立図書館は「全人のために、一人のために」というエカテリーナ二世の命のもとに1795年にその基礎が置かれた。ポーランド戦役におけるスヴォーロフ将軍の戦利品として、ポーランド貴族ザルスキ兄弟の蔵書がワルシャワから送られてきたのであった。すぐにそのための建物の建築が始まり、市の中心部、ネフスキ大通りとサドーヴァヤ通りの角に、建築家ソコロフとルスカによって市民の目を引く建物が建てられた。

オレーニンは1811年に正式に図書館長となり、同時にその名称を「帝立図書館」から「帝立公共図書館」とし、初代館長となった⁽⁸⁾。現在のロシア国立図書館の誕生であった。

図書館こそオレーニンの後半生の仕事の拠点となった場所であった。彼によって才能を認められた文学者、学者、文化活動家たち（クルイロフ、

(7) «Опыт нового библиографического порядка для Санкт-Петербургской Императорской библиотеки».

(8) この図書館の概史は、Российская национальная библиотека, 1795-1995. СПб., 1995. を参照。オレーニンと図書館との関わりについては、Голубева (1997), Stuart (1986) の他、Лихоманов и Николаев (неизд.) も参考にした。

グネディチ、デリヴィグ、ヴォストコフ、エルモラエフ、バーチュシコフ、グレチ等)は図書館にポストを与えられて庇護され、図書館はペテルブルグの文化的中心となっていた。

オレーニンには学術に加えて芸術への野心があった。彼自身絵画に長じ、線画、版画の仕事では、デルジャーヴィン、ヘムニツェル、オーゼロフ、ジュコフスキイ、プーシキンの作品に挿絵を残している⁽⁹⁾。また、造幣局にいたころメダル製作の技法を研究し、その研究論文でも知られていた。1811年、彼は芸術アカデミー(美術大学)総裁となり、そのころ負債で惨憺たる状態にあったアカデミーを再建する仕事を引き受けることとなる。当時の教授の一人が「オレーニンが登場して、アカデミー全体が驚きで目を醒ましたようだった」と回想している⁽¹⁰⁾。

当然、造形芸術のそうそうたる顔ぶれがオレーニンの周りに集まることとなった。彼はこれら建築や彫刻の人材を使って、1820年以降イサク寺院、カザン寺院の記念モニュメント、アレクサンドル戦勝記念塔、ナルヴァ戦勝門といったペテルブルグの大規模記念建造物の建立に関わってゆくのである。

2. オレーニン家の形成

オレーニンの結婚

1792年のはじめ、プスコフ騎兵連隊の陸軍中佐(7等官)であったオレーニンはエリザヴェータ・マルコヴナ・ポルトラツカヤ(1768-1838)と幾多の困難を乗り越えて結婚する。彼女はエリザヴェータ・ペトローヴナ帝の時代に宮廷合唱団を創設したマルク・フョードロヴィチ・ポルトラツ

(9) デルジャーヴィン「芸術愛好家に」(1795)の挿絵、プーシキン「ルスランとリュドミラ」(1820)の挿絵等。

(10) Иордан Ф. И. Записки ректора и профессора Академии художеств Федора Ивановича Иордана. М., 1918. С. 14.

キイ（1729-1795）の長女であった。

父のマルクはウクライナの教会で歌っていたところを女帝の寵臣アレクセイ・ラズウーモフスキイにその美声を認められて、都にのぼった。才もないポルトラツキイは宮廷に入って女帝の特別の厚意を得て、ウクライナでの商業的特権も手にした。宮廷に大きな影響力を持ち、一代で莫大な財産を築きあげた新興貴族であった。あまりの成り上がりぶりにポルトラツキイは人の噂の的ともなり、また、彼の二度目の妻アガフォクレヤはその特異な個性が何人かに書き残されてもいる女性である。彼らの孫にあたるアンナ・ケレンは次のように書いている。

「(祖母は) まだ人形遊びをしていたころ、マルク・フォードロヴィチ・ポルトラツキイに嫁いだ……彼はとても美男子で善良な人だった……彼女は美人だったが読み書きはできなかった。だが、とても頭がよく、4000人の農奴を使い、いくつもの工場を運営し、徴税請負業をし、村長を置いて差配させることなく、すべての領地経営をこなしていた……彼女は厳しい性格で、残忍でさえあった……」⁽¹¹⁾

当時のジャーナリストとして鳴らしたグレチは彼女を「名うての女独裁者」と呼んでいた。オレーニンの評伝を書いているファイビソヴィチは彼女の実母アンナと義母となるアガフォクレヤに性格的な共通点を見ている⁽¹²⁾。農奴制のロシアにあつては農奴を非人道的に扱う酷薄無慈悲な地主領主の存在もまた事実であった。彼女たちの血は孫にあたるアレクセイの三男アレクセイ（1798-1854）に引き継がれたのかもしれない。アレクセイ・アレクセエヴィチ・オレーニンはやんちゃで酒好きの「坊ちゃん貴族」で、若いころは進歩的な若者グループに出入りして、親を心配させるほどであったが、最後はリャザン県の領地で自分の農奴二人に撲殺されて

(11) Керн А. П. Воспоминания. Дневники. Переписка. М., 1989. С. 115-118.

(12) Файбисович (2006, 63). アガフォクレヤに関する「伝説」は Ячевич А. Г. Пушкинский Петербург. М., 1989. С. 115-118. に詳しい。さらに Файбисович (2006, 183 注 58) を参照。

終わった。当局の調査報告にも「(農奴への) 非道な扱いのため」と書かれている⁽¹³⁾。

オレーニンの母アンナはポルトラツキ家の娘との結婚に断固反対であった。富裕だが、成り上がりの貴族との縁組を嫌ったのである。自らの出自であるヴォルコンスキイ公爵家との釣り合いがとれるよう、ドルゴルーコフ公爵家のある令嬢と息子を結婚させようと画策したとも伝えられている。オレーニンは結婚後もこの母との確執とポルトラツキ家の評判に苦しんだようである。

周囲の協力やオレーニンの辛抱強い懇願によってなんとか母からの祝福を得て、やっとこぎつけた結婚生活は生涯にわたって幸せなものだった。エリザヴェータは母に似ることなく、優しい、善良なよき妻であり母であり、みんなに慕われる女主人となった。

初めての家

オレーニンは独身時代「ほとんど自分の給料だけで生活してきた」と言っている⁽¹⁴⁾。いくつも領地を持つオレーニン家のたった一人の息子であったが、経済的にもまたおそらく精神的にも親に頼れない現実があったのだろう。父親は多額の負債を残して1802年に亡くなった。オレーニン家に生まれていても、子としての従順さを表現してはいても、手紙等に両親への敬慕のこもった表現は見つかっていないようである。自らの出生の事情を知っていたからかもしれない。

結婚して、彼はペテルブルグ市内に初めて自分の家を持つことになる。エリザヴェータが持参金として親からフォンタンカ川右岸の土地を与えられ、石造りの三階建ての家(現在のフォンタンカ川岸通り、101番地)が建てられたのだ。名義人は妻であったにしろ、これこそ彼にとって初めて

(13) Тимофеев (2004, 26).

(14) В. П. Кохучевイ宛てオレーニンの書簡(1802年10月18付)をアーカイヴで発見したファイビソヴィチによる。Файбисович (2006, 418).

の家であり、オレーニン家の始まりであったともいえるだろう。

アガフォクレヤはこのあたり一帯に広い土地を所有していて、エリザヴェータに与えた家の他、隣にさらに二軒の家を建てている。それらの建物のうしろは広い中庭となり、厩舎、乾草小屋、馬車用の小屋、使用人の住居などがあり、ウオッカの蒸留所もあった。近くのセンナヤ広場に公衆浴場も経営していた。その他市内に所有する家作もあったが、ポルトラツキイ家は子沢山の家で、これらは次々と娘の持参金になっていった。

ウサージバへの指向

エカテリーナ二世時代の初期にモスクワで生まれたオレーニンに故郷はあったのだろうか。生来のパトリオットである彼には祖国ロシアへの愛と情熱はすべての面に見られるのだが、自分のどの領地にふるさとの感情を向けていたのだろうか。オレーニンは「子供時代は主にリャザン県カシモフ郡の領地サラウルで過ごした」⁽¹⁵⁾とされている。彼がペテルブルグに連れてきて女官として宮中に出仕させた十歳以上離れた妹二人は主にこのオレーニン家伝来のサラウルの領地で暮らした。父のニコライも軍隊を引退した後はカシモフ郡の貴族団議長になっている。しかし、オレーニンがこの地に愛着を持っていたかは疑問である。

なぜなら、オレーニンの出生に関して、1849年より帝立公共図書館長となったM. A. コルフは断定的な筆致で、オレーニンの実父はエカテリーナ二世の下で式部長官を務めた宮廷内の実力者、マトヴェイ・カシタリンスキイであるとし、「……その低い背丈はその息子に引き継がれた」と書いている。近年、さまざまな傍証を検討して、コルフの言に信憑性を置く研究が主流となっているのである⁽¹⁶⁾。18世紀、ロシアでも宮廷・上流社会は公然の秘密の渦巻く世界であった。

(15) Голубева (1997, 8).

(16) Файбисович (2006, 19). Корф М. А. Из записок барона М. А. Корфа. Русская старина. 1900. Т. 102. С. 269.

几帳面で真面目なオレーニンが人格形成期の若い日々ドレスデンで得たものはヨーロッパ人として通じる古典主義的な教養と幾多の外国語だけではなかった。それは確固たる祖国ロシアへの愛と忠誠心でもあった。彼はドレスデンで多大な庇護を受け、敬愛したペロゼリスキイ＝ペロセリスキイ公爵のようなインターナショナルな人物にはなり得なかったのである。彼は規定の留学年限が終わると迷わずロシアへ帰り、国家勤務に就いて、任務目標に邁進した。

19世紀前半のロシア貴族世界は、ヨーロッパ、特にフランスであろうとした時代であった。ロシア語をうまく話せない貴族もまれではなく、トルストイの『戦争と平和』に見られるまでもなく、上流社会はフランス語での世界であった。オレーニンはこういう「フランスかぶれ」を批判し、またドイツ語も会話で使おうとしなかったのである。

オレーニンはロシア貴族の生活の根が伝統的な領地屋敷であるウサージバにあり、そこに精神的安定を求めていることを十分認識していたようだ。「そこは違った世界、そこにはすべてがある」という言い回しで表現されるように、ウサージバは地主領主の王国であり、完璧な自由があった。忠実な国家の僕であるオレーニンが貴族として自分のウサージバ創設に夢を持ったとしても不思議ではない。父祖から伝わるものに複雑な感情が介在していたとしたらなおさらであったろう。

フォンタンカ川沿いにある市内の家も賑やかになっていった。結婚の翌年に長男のニコライ、翌々年に二男ピョートルが続けて生まれ、家内使用人も多くなった。この家の客間はオレーニンの知人・友人がより集い、学識や人柄を慕って大勢の客が訪れ、女主人エリザヴェータは快く客をもてなして、サロンようになっていった。

オレーニンは家族の夏の家ともなるよう、首都からほど遠くないところにウサージバを持つことを考え始めたのである。

3. ウサージバ・プリューチノをつくる

リャーボヴォとプリューチノ

軍の勤務から文官へと方向転換した1795年、オレーニンは首都ペテルブルグの北東近郊、オーフタ火薬工場の先の、ペテルブルグから16ヴェルスタ（約17キロメートル）のところにある荒地776デシャチーナ（約800ヘクタール）を購入する。やはり、妻エリザヴェータの持参金で買ったもので、正式な所有者は彼女であった。

まもなくウサージバの建設が始まり、このウサージバは「プリューチノ」という名をつけられる。隠れ家ほどの意味である。プリューチノはダーチャと呼ばれることもある。ダーチャとはもともとピョートル一世の時代に下賜された土地の意味で使われた。新都ペテルブルグに臣下を住みつかせるための土地であった。また、ピョートル一世は離宮ペテルゴフへ向かう街道沿いに土地を下賜して、沿道を重臣たちの華美な別邸で飾らせたのである。ダーチャとウサージバは区別なく使う場合もあるが、ウサージバは単なる邸館ではなく、必ず周囲に家政上の経済活動部分を備えているというのが基本的な考え方である。ペテルブルグからバルト沿岸地方には領主屋敷をさす「ムィザ」という言葉もあり、プリューチノはムィザと呼ばれることもある。

現在プリューチノの所在はレニングラード州フセヴォロシスク市に入るが、革命後の1918年まではシリセリブルグ郡であった。一帯は北のラドガ湖、南のネヴァ川の間位置し、大小の河川が走っている台地や丘陵地で、いたるところ沼や沢がある地形である。オレーニン家が購入したところは未使用の空き地であった。

そこはリャーボヴォと呼ばれる領地の一部で⁽¹⁷⁾、最初の領主はピョー

(17) ウサージバとしてのリャーボヴォの歴史に関しては、Мурашова и Мыслина (2008, 7-34) を参照。

トルー世よりその地を下賜された、アレクサンドル・メンシコフであった。寵臣でインゲルマンランディア公と呼ばれてペテルブルグ地方を支配していたメンシコフが1727年に失脚し、この地はいったん国庫に没収された。次にこの地はアンナ・イワーノヴナ帝の寵臣ビロンの手にわたされたが、彼も失脚、流刑という運命をたどり、この領地は何人もの貴族の間をめぐってゆくことになる。

1773年よりイヴァン・フレデリクスが所有し、そこに最初のウサージバであるリャーボヴォを建設した。大金持ちの企業家であったフレデリクスは首都に近いこの地にはじめ園遊・祝宴用の壮大華美なウサージバをつくろうという意図を持っていた。ペテルブルグまでを一望できる小高い山に邸館を構えて、周囲の低地の沼に運河を引いて、土地改良を施すべく大工事をしたが、途中で彼の考えが変わり、結局、木造の主館と使用人用の家屋、大温室、整形庭園をそなえた4ヘクタール半ほどの小さいウサージバとなる。フレデリクスは土地使用の目的を経済活動に変えて、畜産の施設、畑地、葡萄酒醸造所、製鉄工場をつくった。

リャーボヴォの領地は1779年、息子のグスタフが相続するが、16年後に売却する。この時点でオレーニンはプリューチノとなるその土地の一部を手にいれたのであろう。

オレーニン家がプリューチノを所有している間、リャーボヴォはゲルテリ、トルスターヤ、フセヴォロシスキイと落ち着きなく所有者が替わるが、1818年から大富豪のB. A. フセヴォロシスキイのものとなることによってこのウサージバは盛期を迎える。プリューチノのオレーニン家にとっても付き合いの必要な隣家であった。

貴族オレーニンの経済力

この隣家と比較すれば、オレーニン家は貧しかった。オレーニンはつねに経済的な問題に苦しんでいたとどの文献にも書かれている。実際に彼はどのような経済力を持ち、どういう心づもりで経費のかかる首都での家に

加えて、郊外にウサージバを持つことにしたのであろうか。前述のような独身時代の貧しさを考えれば、オレーニンは将来にどのような経済的展望を持っていたのだろうか。能力を頼りでの官途の出世と親からの領地相続は期待できたのだろうか。

母のアンナが1812年に亡くなるまで、オレーニンがどのぐらい領地の実権を持っていたかはわからない。彼女は夫が亡くなった時、弟のグリゴリー・セミョーノヴィチ・ヴォルコンスキイ（1742-1824）と謀って、当然息子が相続するべきシムビルスクの領地を取り上げ、弟にやっつけまわっている。母の理不尽な仕打ちに控えめな抗議をしつつ、オレーニンは耐えるしかなかった。これは相当世間の響きを買う行為であつたらしく、グリゴリーが亡くなってから、彼の妻と息子たちはオレーニンにその領地を返している⁽¹⁸⁾。

オレーニンの評伝作者であるファイビソヴィチは1812年から1843年のオレーニンの経済状態に次のように迫っている。1861年の農奴制廃止までは金銭は富裕さの一番の目安とはならなかった。最も重要なのは農奴の所有数であった。オレーニンの在命中に行われた第8回納税人口調査をもとに見てゆく。全ての貴族を農奴所有数によって6段階に分けているが、それによれば、一番上のランクの1000人以上農奴を有する貴族は全貴族数の1.1%にあたり、このランクの貴族の所有になる農奴はロシアの全農奴の33パーセントになる。当時オレーニン家は16の領地と2435人（納税男子数）の農奴を所有していた。したがって、貴族階層の中でも一番上のランクに属していたことになる。

納税農奴一人がもたらした収入はB. T. セメフスキイの研究によれば、アレクサンドル一世の治世の後半では13ルーブリ（銀貨）とあり、オレーニン家の場合、所有農奴数より85人を控除して計算すると、30550ル

(18) Файбисович (2006, 422-423). Волконский С. Г. Записки. Иркутск. 1992. С. 142. 彼はデカбриストとしてイルクーツクへ流刑された。

ープリ（銀貨）または 91650 ループリ（紙幣）となっただろうと推定する。プリユーチノの建設に取り掛かったころは文官に転身した 30 歳すぎのころであり、まだはるかに貧しく、以降の官務での精励には経済的動機も大きく働いていたと思われる。

官僚としての有能さを認められてオレーニンは各方面の職務を兼務して収入をふやしてゆく（兼務の職には無給のものもあった）。収入の形態には給与、食費、年金等あり、すべてを詳らかにすることは不可能であると言うが、ファイビソヴィチは 1834 年のオレーニンの収入は分かっている給与型収入だけでも 16200 ループリを下らないと言う。

さらにオレーニン家にはペテルブルグ市内に賃貸に出している家屋があった。一つの住戸を 1831 年に年 10000 ループリで貸していたことからみても、家賃収入はかなりの額になっただろう。オレーニンは市内の住居を何度も変えているが、自邸を賃貸に出すために転居を繰り返しているような観さえある。ともあれ、評伝著者は 1830 年代のオレーニンの年収は 100000 ループリをはるかに超えたものだったことは確かだと言っている⁽¹⁹⁾。

オレーニンはプリユーチノとなる土地を 3000 ループリ紙幣（銀貨の 3 分の 1）で買っている。将来これほど多額の収入を得る人物のウサージバとしてのスタートはきわめてつましいものだったとも言えよう。

ウサージバ創設の意図とその構想

オレーニンが 1795 年にプリユーチノを建て始めたころ、自分の将来の収入を想定していたとすれば、彼の計算上の見通しは正しかったのだろうが、実際の家政と領地経営は思惑通りにはいかなかったようだ。

首都郊外のウサージバを建設するにあたって、オレーニンは遊楽のための別邸をつくらうとは決して思っていなかった。もちろん、経済的制約と

(19) Файбисович (2006, 417-420).

いう現実があったのだが、彼の目論見は「イギリス流の賃貸農場または farm」とメモに書き記したことで知られる⁽²⁰⁾。

18世紀ヨーロッパにおけるイギリスの経済的成功はロシア人のイギリス認識を新たにさせた。特に農業における成功にロシアの開明的な地主貴族たちは注目し、イギリス式の合理的農業経営に憧れにも似た感情を抱いていた。1780年から5年間をドイツで過ごしたオレーニン是人よりもイギリスの事情に通じ、これからつくろうとするウサージバ経営にはひとかたならぬ自負があったのであろう。

オレーニンは「この小さな農場は、比較的少額の資本を投入し、利用者自身の持つ労働力と限られた雇用労働を基盤とする生産組織で、主として農場主自身とその家族の必要を満たすことを目的とする」と、プリューチノの出発点を述べている⁽²¹⁾。このようにオレーニンが目指したのは大きな収入をもたらす営利的な大農園経営ではなかった。もっぱらオレーニンの家計の助けとなるべく、実利的な農園ウサージバをつくろうとしたのである。彼は他県の領地より48人の農奴をプリューチノへ移住させた⁽²²⁾。

この時期、オレーニンは軍から銀行へと勤務を替えている。家を構えて妻子を持つ地主貴族として、ロシアの伝統的生活形態であるウサージバをイギリス流の合理的経営法を用いて生産的なものとし、生活の基盤を固めようという意欲に満ちた、30歳前半のオレーニンであった。

ウサージバは1795年に土地が購入されてからすぐに必要なものから建設が始まった。1798年までの建物は全部木造だったが、ルビヤ川の向こうに石造建築へ建て直すための建材を供給する目的でレンガ工場が建てられた。

オレーニンは1797年から1799年のメモ帳に幾度もプリューチノに建てるべき建物のリストをつくっているが、それらに大きな変更は見られない。

(20) Приютино (2008, 24).

(21) Приютино (2008, 25).

(22) Приютино (2008, 22).

ある時期のリストには次のような建物が書かれている（下線はすでに建てられたもの）。

- 1 主人館
- 2 家畜飼育場
- 3 洗濯場付き使用人用百姓家型住居
- 4 使用人用の倉庫、いずれ主人用とする
- 5 牛乳小屋
- 6 主家用風呂小屋
- 7 鍛冶場
- 8 温室 花壇
- 9 納屋
- 10 穀倉
- 11 物置⁽²³⁾

1799年に書かれた新しいリストでは「すべての必要建築物」のうち、主人館、家畜飼育場、馬小屋がすでにあり、使用人用風呂小屋、洗濯場、鳥飼育場、鍛冶場が仕上げ中で、納屋と倉庫、穀物乾燥小屋、牛乳小屋が準備中、これからつくる予定のものとして野菜保存庫、温室、病院、水車製粉所があげられている。病院と水車製粉所は結局実現されることはなかったが、おおよそ彼の思惑通りのウサージバ建設が進んでいたようである。

オレーニンがウサージバを所有する地主領主が知っておくべき知識を次のように列挙している。

- 1 農業の理論的認識：天候、土地、草、土地に関する科学、技術と工芸の知識

(23) Приютино (2008, 26).

- 2 農民と労働者について：仕事の差配，監督，構成，治療
- 3 建築について：建材，建築の種類，器具一般について
- 4 農業について：麦の播種と収穫，草刈り，糞肥，農業器具について
- 5 畜産について：家畜一般，構成と繁殖，病気，鳥類，魚類について
- 6 造園について：庭園，温室，花壇，菜園と森について
- 7 草について：薬草，播種用の草，手工業の材料となる草について
- 8 工場と手工業について：醸造工場，皮革工場，帆布工場，亜麻工場，ラシャ工場，水車による工場一製粉，製材，バター製造について，養蚕と養蜂について

上記項目を一括した事典⁽²⁴⁾

初めて自分の手で作りあげたウサージバ・プリューチノを営み始めて数年間、オレーニンは自分の経営的な成功に自信をつけていたようである。1802年頃には蒸留酒製造所をつくることも目論んでいた。

プリューチノは家族にとっての夏の家となり、また家内工業的生産で家計を支えるはずであった。

4. プリューチノの姿とその文化的変容

プリューチノの姿

では、出来あがったプリューチノはどんな姿をしていたのだろうか。プリューチノは一気に出来あがったわけではなく、少しずつ段階的に姿を整えていった。現在、プリューチノは幸運にも博物館となり、かなりの部分

(24) Приютино (2008, 28).

が往時の姿をとどめている。失われて今は見えなくなった部分も含めて、このウサージバを見渡してみよう。

土地を取得してオレーニンがルビヤ川の左岸の高みにウサージバを置くことにした。ルビヤ川には飲用に適した小川が三本流れ込んでいた。ここからは春先の雪解け水で冠水する景色のよい氾濫原が見はらせ、その向こうには広大な混合林が地平線まで続いていた。

プリューチノの領地全形については、「それが占める形状はチョウが羽を広げた形に似ている。両方の羽の内側全域にわたって、きわめて清涼な水の流れが二つあり、中央部で合流している……域内は四つの中小の谷とそこを潤す三つの速い流れの小川で分かたれている」と、1841年に作成された売買契約書には描かれている⁽²⁵⁾。

プリューチノは1974年に「文学・芸術ウサージバ・プリューチノ」という名のミュージアムとして開設された。ミュージアム化するための準備段階で、オレーニンがA. II. ブリュロフに指示して作成させたウサージバ内建造物の図面と、前記の売買契約書が修復計画の基本となった。オレーニンは夫人の遺言によりプリューチノの売却を決意し、苑内の建物を絵図で残そうとしたのであった。指示を受けたブリュロフが芸術アカデミーの画家たちを指導して作成したのであろう12枚の図が芸術アカデミーに残されている。

プリューチノ博物館発行のパンフレットに描かれた建物等配置復元図(図1)でウサージバを見てゆくことにしよう。①～⑱の施設が示されているが、①の主館は保存修復されて博物館として公開されているが、他はまだ修復に至っていないものがほとんどである。

オレーニンのメモから見ると、当初彼は業務用の建物をすべて木造でつくるつもりだったようだ⁽²⁶⁾。しかし、1799年5月12日以降のメモは建

(25) Приютино (2008, 33).

(26) Приютино (2008, 27), さらに Тимофеев (2007, 12).

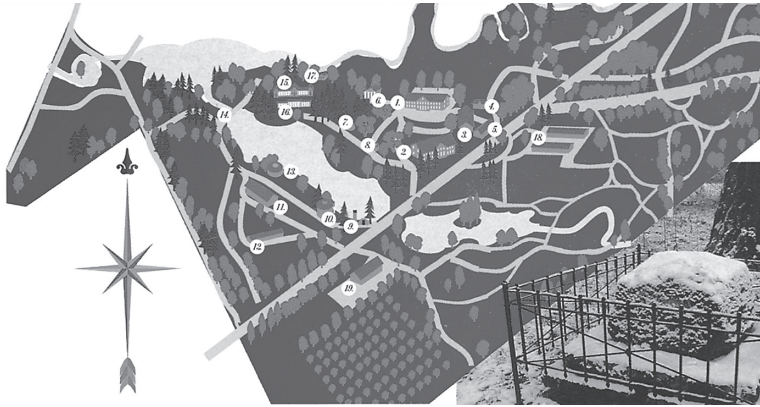


図 1

材用のレンガを焼くための窯の設置に関するものが多くなっている。業務用の建物は領地内の樹木を利用して木造にするはずであったが、レンガの原料となる良質のローム土と砂が領地内に発見されて、方針が変わり、レンガ工場がつけられたのだ。レンガの産出は1799年の夏には始まっている。このころオレーニンは首都の職場である造幣局で貨幣の新型鑄造機設置について苦心していた。

レンガ工場の稼働により、プリューチノではすべての建物が石造りとなり、メモに記されたものとは全く趣の違う建物が建てられることとなった。

主館は左岸の一番の高みに建てられた。正面玄関側が南の庭に向き、庭を四角く取り囲むように他の建物も建てられてゆく。しかし、1799年のメモではもう主館を建替えたいとの記述がある。位置はそのままに、この建物は段階的に少しずつ建増し、改修が行われたらしく、1820年頃までかかって最終的な姿となったようだ。

今に残る主館は一階が南側の各部屋が一行に連なる建築形式でつくられている。主人の部屋の前に通り抜けの部屋があり、オレーニンの書齋、客間ギャラリー、客間、小食堂、食堂、女主人の寝室と続く。それら部屋のつなぎのように女中部屋があり、そこへは玄関の間からの入り口と二階へ



図 2

の階段がある。二階には 14 部屋があり、そのうち 6 部屋は来客用、他は自家のためのものであった。部屋を分ける内廊下が部屋と並行してあり、部屋はどれも小さいものであった。

一階の南側付き出し部分に置かれた客間ギャラリーが一番大きく、内開きのフランス窓が三つあった。この客間を描いた Φ. T. ソンツェフの絵 (1834 年、図 2) を見ると、その部屋が質素なものだったことが一目瞭然である。部屋は壁の上部が花模様のフリーズで飾られているだけで、椅子やテーブルといった調度はつましいものなのである。この主館の設計は 18 世紀の後半につくられたウサージバによくあるものであった。

1972 年から 1977 年にかけて実地検証をし、主館の修復の準備をした JI. B. チモフェーエフは、建物は徐々に段階的に建てられており、部屋の用途や配置、暖炉の位置なども何度も変えられているとする。また、資金不足のため、主館と牛乳庫上のロトンダ⑩にしか鉄製の屋根がつけられていないと言う⁽²⁷⁾。

庭の向こうに客用の別館②が主館と並行するようなかたちで建てられた

が、主館と同じく二階建てで、規模も外形も同じもので、質素な作りだった。二つの棟は主玄関を向かい合わせるように建っていた。別館は他の建物よりかなり遅く建て始められたが、やはり、改築が行われている。

年を経て、エリザヴェータ・マルコヴナが老齢のため近くの教会に通えなくなったとき、オレーニンは教会の許可を得て、1830年にこの別館のなかの東側に家内教会をつくったが、それは全体の三分の一を占めることとなった。

これら主人家族や客人用の二つの建物の東側に、中庭を囲むように二階建てで、二階部分は丸太造りの使用人用の建物③があった。使用人棟の後ろ側の右手には洗濯場のある主人用厨房④を建て、左手には穀物の保存庫⑤をつくった。

主館の近く、ルビヤ川の険しい岸辺にレンガの丸天井とその上に蔵を置いた貯蔵庫⑥があった。少し流れを下ったところに主人用の風呂小屋⑦があり、その屋根裏には部屋があって人が住めるようになっていた。イワン・クルイロフが住みついて、数々の寓話名作をつくり出した場所である。

そこから少し離れたところに石造の温室が二棟あり、一棟⑮ではモモやブドウ、さまざまな異国の植物や花が栽培され、パイナップルもあった。花用の温室⑯には温度維持のための炉があった。

開かれた草地には花崗岩の台座に日時計⑧がつくられていた。また、客用別館から近くの水辺には子供の遊戯用の石造の要塞もあった。

二つの主人用建物とその他のすべての建物や造作物は庭園の中に置かれていたと見ることができる。オレーニンはウサージバにイギリス式風景庭園をつくったのである。彼のメモのなかの地主の必須知識には「庭園について」があるが、項目だけで、内容は書かれていない。しかし、ロシアでも風景庭園が主流となっていた時代であり、また風景庭園は財政状況の厳しいオレーニン家にとっては必然的なものであった。プリューチノを約

(27) Тимофеев (2007, 13).

半世紀所有したオレーニンがこのウサージバにかけての全金額は100000ルーブリだったと言われるが、庭園にそれほど多額の資金を投入することはできなかったはずである。

プリューチノの庭園・パークはほとんどこの土地の自然が持つ力そのものを利用してつくられている。ルビヤ川を中心にそれに流れ込む小川の流れを、1802年に水門と堤をつくって、うまく堰き止め、効果的な池をつくることで舞台が出来あがった。まさに土地の「ケイパビリティ」を引き出した庭園で、審美性と経済性が両立するものであった。

池をはさんで主館の向こう側には、水辺近くに鳥小屋⑬があった。少し東寄りにある、4本の柱のポーチを付けた優美なロトンダ（牛乳庫）⑩は、対岸の主館からはその水に映った影とともに見える。その横には土から生えたのではと思えるような異形の鍛冶場⑨もあった。南の離れたところには家畜飼育場⑫があった。街道が池を横切るために杭を打って橋が架けられていたが、街道の向こう側の池の中にはウサギ島があり、近くに果樹園がつくられて、そこではスイカやメロンを育てるための温床があった。納屋もあり、寒い時期に桜の若木を保護していた。そのあたりには厩舎と馬車小屋⑭があった。池を挟んで南側には穀物乾燥小屋⑮があった。

オレーニンは樹木を伐採してウサージバを拓くにあたって、古い白樺とトウヒを残し、池の岸辺には柳を植え、ルビヤ川の左岸の高みには若いボダイジュを植えた。女主人のエリザヴェータ・マルコヴナが花を愛していたので、プリューチノはいつも花で埋まっていた⁽²⁸⁾。温室で育てられた植物は花壇や桶に移され、また小道に沿ってボーダーガーデンのような花壇もつくられていた。

主館から北西の川の向こう側にはオレーニン村とかプリューチノ村とか呼ばれる村があり、1817年の設計図では4軒の百姓家があった。ここへオレーニンは8所帯を住ませるために4軒の同じようなレンガ造りの建

(28) Тимофеев (2007, 16-17).

物と様々な作業場を建てた。ここはレンガ工場があったところである。

プリューチノの作者

出来あがったウサージバの姿はオレーニンが1797年～1799年に書き残したメモからはかなり違ったものとなったようだ。プリューチノは誰の設計によるものなのだろうか。

どの研究者も H. A. リヴォフ (1753-1803) との関係に言及している。建築、造園、音楽、詩、絵画という多方面の才能に恵まれ、考古学、民俗学にも足跡を残した天才芸術家のリヴォフはオレーニンの親友でもあった⁽²⁹⁾。

しかし、オレーニンの当初の志は「あまり大きくない、実利的な、家族のための夏の家」をつくることであった。このオレーニンの始めの目論見はリヴォフよりもむしろ、A. T. ボロトフ (1738-1833) の考えに近いものであったと思われる⁽³⁰⁾。ボロトフの流儀は中小規模のウサージバで実利性を持ちながらも、ロシアの自然の独自性を生かした新しい風景庭園を目指すものだった。

ボロトフと対照的にリヴォフは大規模なウサージバに広大な自然庭園をつくり、それに古典的な趣と整形性を巧みに織り込んだのであった。彼は多くの有名ウサージバの建設に携わり、4巻の『パラディオ主義建築』を著した、ロシア古典主義建築の代表者の一人であった⁽³¹⁾。

このあまり大きくないウサージバであるプリューチノは、全体の特徴として、コンパクトな構成、バランスのとれた穏やかな気分をもたらす設計、絵画的環境と規則的な建物配置の組み合わせ、実務的機能と芸術的要素の結合、池・水面の必然性、街道との関係性があげられる。

規模の点は別として、これらの特徴はリヴォフのつくったウサージバや

(29) 18世紀ロシア文化史の奇才リヴォフに関しては、Бочкарева (2008)。

(30) Щукина (2007, 18-20)。

(31) Щукина (2007, 20-23)。



図3

庭園に共通して見られるものである。また、プリューチノの庭園に置かれた実用的な名称の建造物である、酒蔵、鍛冶場、牛乳庫などはその名にそぐわない特異なフォルムを持ち、実用性はなく、ただオブジェとして庭園のアクセントとなっている。特に牛乳庫は庭園の主人公で、そのローマ的な優美なフォルムからロトングと呼ばれていた（図3）。こういう副次的な庭園設置物に個性的なフォルムを持たせ、自然の景勝のなかに潜ませることはまさにリヴォフの手法であった。いつの間にかオレーニンのウサージバ庭園は実用的なものよりも審美的なものを選んでいたのである。

しかし、リヴォフの直接的な関与があったと認めるには困難な状況があった。1796年にパーヴェル一世が即位してから、彼はあまりにも膨大な仕事を命じられ、忙殺されているからである。1799年、すでに病を得ていたが、クリミヤ、コーカサスへの旅行に出て、ペテルブルグを離れ、その後亡くなっている。明らかにリヴォフの影響は見られるものの、実際に手をつけた可能性は低いのだ。

主館については、設計図が発見されてないこと、幾度も増改築が行われ

ていること、装飾の少ないつましい建築であることから、古典主義時代の建築家なら誰でも造りうるものとだとして、オレーニン自身がつくったという見解が強い。彼は建築や造園にも知識があり、リヴォフの考えを十分理解して、それを自分で実現したとも考えられる⁽³²⁾。

また、リヴォフのもとで修業を積んだ建築家で画家の И. А. イワノフを作者とする見方もある⁽³³⁾。イワノフはリヴォフと共に多くのウサージバ建設にたずさわり、クリミヤ、コーカサスへの調査旅行へも同行している。イワノフはオレーニンから終生愛顧を受け、オレーニンが総裁を務めていた芸術アカデミーで建築のクラスを受け持っていた。

特にロトンダ（牛乳庫）はイワノフがつくったのだろうと言われる。この建造物は対岸の主館からまっすぐに目に入り、オレーニン家の廟とも目されていた。自然石で造った地下蔵の上に建つ、優雅なローマ風のポーチを持つ円柱形の建物の内部には、石の台座があり、丸屋根の頂上の穴より光が真っ直ぐに当たるのだ。プリューチノのなかでも高い完成度を見せるこの建造物は高度な専門技術を持つ建築家の手によってつくられた可能性が濃いことを示唆している。

オレーニン家の人々は毎年5月から10月までプリューチノで多くの客を迎えながら夏の日々を送った。彼らの日常性とその精神的なありようを、続いてプリューチノ別邸から見てみたい。

参考文献

Агамалян Л. Г. (2001) Усадьба Приютино: проблема юридического статуса и административного подчинения. Русская усадьба на пороге ХХI века, Хмелитский сборник, Вып. 3, Смоленск, С. 210-218.

Агамалян Л. Г. (2003) Русская усадьба в эмиграции. (Музей-усадьба «При-

(32) Тимофеев (2007, 19).

(33) Мурашова и Мыслина (2008, 43-44).

- ютино») Русская усадьба. Вып. 9 (25).
- Бочкарева И. А. (2008) Н. А. Львов. Очерки жизни. Венки новоторжских усадеб. Торжок.
- Голубева О. Д. (1988) Хранители мудрости. М.
- Голубева О. Д. (1995) М. А. Корф. СПб.
- Голубева О. Д. (1997) А. Н. Оленин. СПб.
- Дударева В. (1916) Истомино (Усадьба гг. Лениных, Касимовский уезд, Рязанской губернии). Столица и усадьба. № 68. С. 3–8.
- Ефимова И. С. (2006а) Приютино. Три века Санкт-Петербурга. Т. 2. Девятнадцатый век. Кн. 5. СПб. С. 695–700.
- Ефимова И. С. (2006б) Семейная идиллия Лениных. Русская усадьба. Вып. 12 (28). С. 49–68.
- Ключевский В. О. (1980) Неопубликованные произведения. М.
- Козлов В. П. (1999) Русская археография конца XVIII–первой четверти XIX века. М.
- Кружнов Ю. Н. (2005) Оленины. Три века Санкт-Петербурга. Т. 2. Девятнадцатый век. Кн. 4. СПб. С. 715–717.
- Лихоманов А. В. и Николаев Н. В. (Б. г.) Приютино и Императорская Публичная библиотека. Б. г. С. 1–10.
- Мурашова Н. В. и Мыслина Л. П. (2008) Дворянские усадьбы Санкт-Петербургской губернии. Всеволожский район. СПб.
- Оленина А. А. (1999) Дневник: Воспоминания. СПб.
- Приютино (2008) Приютино: Антология русской усадьбы. Составление и комментарии Л. Г. Агамалян и И. С. Ефимовой. СПб.
- Тимофеев Л. В. (1983) В кругу друзей и муз. Дом Оленина. Л.
- Тимофеев Л. В. (2004) От Парфения (Родословная Лениных). Памятники культуры. Ежегодник 2003. М., С. 7–63.
- Тимофеев Л. В. (2007) Приют, любовью муз согретый. СПб.
- Файбисович В. М. (2006) Алексей Николаевич Оленин. Опыт научной библиографии. СПб.
- Шинкарчук С. А. (2008) Литературные усадьбы: Михайловское, Ясная Поляна, Шахматово, Мелихово... Справочник школьника. СПб.
- Шмелев А. А. (2011) Приютино Лениных. К вопросу семантики подзем-

- ных сооружений. Русская усадьба. Вып. 16 (32). СПб. С. 206-223.
- Щукина Е. П. (2007) Подмосковные усадебные сады и парки конца XVIII века. М.
- Stuart Mary (1986) Aristocrat-Librarian in Service to the Tsar. Aleksei Nikolaevich Olenin and the Imperial Public Library. New York.
- 坂内知子 (2012) 「ロシア貴族とウサージバ：A・オレーニンと別邸ブリューチノ (1)」 「人文・自然研究 第6号」 (一橋大学 大学教育研究開発センター) pp. 164-181.